

慶滋保胤六波羅蜜寺供花会詩序訳註

吉原 浩人

はじめに

小稿は、『本朝文粹』巻十「二七六」に収載される、慶滋保胤「七言暮春於六波羅蜜寺供花会」聴講「法華経」同賦三一称「南無仏」詩序の、文章の構造や依拠した文献などを精査することを目的とする。本作品は、六波羅蜜寺において修された供花会の詩序である。撰述の背景ならびに意図、破題など表現の位相、『法華経』など経論の受容、白居易など中国あるいは本朝の先行作品との影響関係については、この訳註を踏まえ、別稿「慶滋保胤六波羅蜜寺供花会詩序考」(『多元文化』第一号 二〇一二・三刊行予定)において詳しく論じる。紙幅の関係で分割したが、本来一体の論考であるので、併せ参照されたい。なお、本文の①から③は私に分段したのであり、傍点その他の記号も適宜附している。

慶滋保胤の供花会詩序訳註

【本文】

七言暮春於六波羅蜜寺供花会聴講「法華経」同賦三一称「南無仏」

慶保胤

①

夫六波羅蜜寺者、空也聖者權二與之一、中信上人潤二色焉一。如二此兩人一者、寧非下奉二如来勅一、為二如来使一、来二此娑婆世界一、度中于濁患衆生上乎。於レ是毎日講二妙法一乘一、毎夜修二念仏三昧一。彼南北二京之名徳日来、通為二講師一通為二聴衆一、東西両都之男女雲集、即合二十指一即致二寸心一。開講已垂三八九載一、結縁不レ知二幾万人一。何況転展随喜之功徳、漸々廻向之薰修乎。暮春三月、百花争開、別修二四日八講一、号二結縁供花会一。其一日為レ導二一切男子一、二日為レ度二一切女身一、三日為レ濟二一切童子一、四日為レ化二

一切僧侶^一也。大哉誓願、無^二得而稱^一之。當^三此時^一也、緇素相語曰、世有^二勸学会^一、又有^二極樂会^一。講經之後、以^レ詩而讚^レ仏。今此供花之会、何無^二歎^レ仏之文^一哉。滿座許諾、誰人間然。

②

便以^三經中^一稱南無仏一句^一、抽為^二題目^一。往昔無^二信心^一無^二善心^一、其心或乱心、不^二再稱^一不^二三稱^一、其稱只一稱。彼人莫^レ不^二成仏^一、莫^レ不^二得道^一。

③

嗟乎我党一心無^二余心^一、千唱又万唱。脱^二此凡身^一、登^二于覺位^一、且何疑哉、何疑哉。中有^下垂^二白髮^一紆^二朱衫^一者^上。身暫雖^レ在^二柱下^一、心尚如^レ住^二山中^一。少壯之年愁詠^二一事一物^一、強求^二名聞^一、衰暮之日或記^二燕詞狂句^一、將^レ撰^二菩提^一。今日推為^二唱首^一、不^二敢再辭^一。聊述^二大綱^一、備^二於後事^一、云^レ爾。

【詩序の文章構造】

①

発句 夫
傍字 六波羅蜜寺者、
長句 空也聖者權^二興之^一、中信上人潤^二色焉^一。
漫句 如^二此兩人^一者、
傍字 寧非^下
緊句 奉^二如来勅^一、為^二如来使^一、

長句 来^二此娑婆世界^一、度^中于濁惡衆生^上
送句 乎。

傍字 於是

長句 毎日講^二妙法一乘^一、每夜修^二念仏三昧^一。

傍字 彼

密隔句 南北二京之名徳日来、通為^二講師^一通為^二聴衆^一、東西兩都之男女雲集、即合^二十指^一即致^二寸心^一。

長句 開講已垂^二八九載^一、結縁不^レ知^二幾万人^一。

傍字 何況

長句 転展随喜之功德、漸々廻向之薰修乎。

緊句 暮春三月、百花争開、

長句 別修^二四日八講^一、号^二結縁供花会^一。

傍字 其

密隔句 一日為^レ導^二一切男子^一、二日為^レ度^二一切女身^一、

三日為^レ濟^二一切童子^一、四日為^レ化^二一切僧侶^一

送句 也。

漫句 大哉誓願、無^二得而稱^一之。

漫句 当^二此時^一也、緇素相語曰、

長句 世有^二勸学会^一、又有^二極樂会^一。

漫句 講經之後、以^レ詩而讚^レ仏。

漫句 今此供花之会、何無^二歎^レ仏之文^一哉。

緊句 滿座許諾、誰人間然。

②

漫句 便以^二經中^一称南無仏一句^一、抽為^二題目^一。

傍字 往昔

雜隔句 無^二信心^一無^二善心^一、其心或乱心、

不^二再称^一不^二三称^一、其称只一称。

傍字 彼人

緊句 莫^レ不^二成仏^一、莫^レ不^二得道^一。

③

傍字 嗟乎我党

長句 一心無^二余心^一、千唱又万唱。

緊句 脱^二此凡身^一、登^二于覺位^一、

傍字 且

壯句 何疑哉、何疑哉。

漫句 中有^二垂^一白髮^一紆^二朱衫^一者^上。

長句 身暫雖^レ在^二柱下^一、心尚如^レ住^二山中^一。

雜隔句 少壯之年愁詠^二一事一物^一、強求^二名聞^一、

衰暮之日或記^二蕪詞狂句^一、將^レ撰^二菩提^一。

傍字 今日

緊句 推為^二唱首^一、不^二敢再辞^一。

緊句 聊述^二大綱^一、備^二於後事^一、

送句 云爾。

【訓読】

七言暮春六波羅蜜寺の供花会に於て法華經を講ずるを聴き同じく「一称南無仏」を賦す

慶保胤

①

夫れ六波羅蜜寺は、空也聖者之を権興し、中信上人焉を潤色す。此の両人の如きは、寧ぞ如来の勅を奉じ、如来の使と為り、此の娑婆の世界に來り、濁惡の衆生を度するにあらざらんや。是に於て毎日妙法一乘を講じ、毎夜念仏三昧を修す。彼の南北二京の名徳日々に來り、通に講師と為り通に聴衆と為り、東西両都の男女雲集し、即ち十指を合せ即ち寸心を致す。開講已に八九載に垂んとして、結縁幾万人なるかを知らず。何に況んや転展隨喜の功德、漸々廻向の薰修をや。暮春三月、百花争ひ開き、別に四日八講を修すを、結縁供花会と号す。其の一日は一切男子を導かんが為に、二日は一切女身を度さんが為に、三日は一切童子を済はんが為に、四日は一切僧侶を化さんが為なり。大なるかな誓願、得て之を称すること無し。此の時に當るや、縑素相語りて曰く、世に勸学会有り、又極楽会有り。講經の後、詩を以て仏を讃ず。今此の供花の会、何ぞ仏を歎ずるの文無からんやと。満座許諾し、誰人か問然せん。

②

便ち經中の一称南無仏の一句を以て、抽きて題目と為す。往昔信心無く善心無く、其の心或は乱心し、再称せず三称せず、其の称只一

称なり。彼の人成仏せざるはなく、得道せざるはなし。

③

嗟乎我が党一心に余心なく、千唱また万唱なり。此の凡身を脱し、覺位に登ること、且た何ぞ疑はんや、何ぞ疑はんや。中に白髪を垂れ朱衫を紵^まふ者有り。身暫く柱下に在りと雖も、心尚ほ山中に住するが如し。少壯の年愁に一事一物を詠じて、強ひて名聞を求むるも、衰暮の日或は蕪詞狂句を記して、將に菩提を撰ぜんとす。今日推されて唱首と為るも、敢へて再び辞せず。聊か大綱を述べて、後事に備ふと、爾か云ふ。

【現代語訳】

七言暮春に六波羅蜜寺の供花会において法華經の講説を聴き同じく「一称南無仏」の句題で賦します

慶滋保胤

①

いったい六波羅蜜寺は、空也聖者がこれを開創され、中信上人が中興されたところです。このお二人のごときは、どうして如来のご命令を奉じて、如来のお使いとなり、この娑婆の世界に來臨され、濁惡の衆生を化度する方でないことがありましようか。ここにおいて毎日『法華經』一乘の教えを講じ、毎夜念仏三昧を修します。かの南北二京の名徳が日々にやってこられ、たがいに講師となりたがい聴衆となり、東西両都の男女が雲のように集まり、すなわち十指

を合わせて合掌しすなわち心を致して仏を拝みます。この供花会が開講されてからすでに八九年になろうとしており、結縁の衆生は幾万人になるかわかりません。まして次々と受けた教えに喜び随う功德や、次第に回向を勤める習慣にはかりしれないものがあるので。暮春三月に、たくさんの花が争って開き、特別に四日間で法華八講を修す行事を、結縁供花会と称します。その一日目はすべての男性を導こうとするために、二日目はすべての女性を度そうとするために、三日目はすべての子供たちを済おうとするために、四日目はすべての僧侶を化そうとするためのものなのです。これらは偉大な誓願ではありますが、詩文でこれを褒めたたえる者はありません。この時にあたって、僧侶が相語つて言うには、世に勸学会があり、また極樂会もあります。これらの法会では講經の後に、詩をもつて仏を讃じております。今この供花の会に、どうして仏を讃歎する詩がないことがありましようかと。満座の人々は承知し、誰が非難することがありましようか。

②

すなわち『法華經』中の「一称南無仏」の一句をもつて、抜き出して題目といたします。過去世より信心もなく善心もなく、その心はあるいは乱れた心となり、二度仏号を称えることもせず三度仏号を称えることもせず、その称えることはただ一回のみです。しかしそのような人であつても成仏しない者はなく、悟りを得ないものはありません。

③

ああ我が仲間ハ心を一つにして他の心はなく、ある人は千回も仏号を称えある人は一万回も仏号を称えています。この凡夫の身体を脱し、覺者の位に登ることは、またどうして疑うことがありましようか、どうして疑うことがありましようか。その中に白髪を垂れて朱の衣服をまとう者がおります。その身はしばらく内記の職にあるといつても、心はなお山中に住して仏道修行をしているようなものです。少壮の年にはうかつにも世俗の事がらや物ごとを詠じて、あえて名聞を求めておりましたが、年老いた日にはあるいは蕪雜な詞や狂った表現の句を記して、まさに菩提を摂りおさめようとするのです。今日推薦されて序者となりましたが、あえて二度の辞退はいたしませんでした。いささかここにおおよその内容を述べて、将来の事に備えますと、このように申し上げます。

【註釈】

題

○暮春 陰曆三月。「暮春風景初三日、流世光陰半百年」(白居易「三月三日」)、『白氏文集』卷十八「一一六八」、『千載佳句』卷上「二四五」。「暮春三月」の項参照。

○六波羅蜜寺 京都市東山区轆轤町にある寺院。空也は、天曆五年(九五二)に流行した悪疫の死者を供養するため西光寺を創建し、応和三年(九六三)に落慶供養を厳修した。空也逝去後、第二世

中信の時に現寺名に改め伽藍を整備した。

○供花会 仏前に花を供える法会。

○一称南無仏 一度だけ南無仏となえる。この供花会詩会の句題。

『法華經』方便品の偈文の一節。人が乱れた心を持っていたとしても、塔廟の中に入り、たつた一度だけ南無仏と称えさえすれば、仏道を成ずることができるとする。「若人散乱心、入於塔廟中、一称南無仏、皆已成、仏道」(『法華經』卷一・方便品「大正九一九上」)。

○慶保胤 慶滋保胤。？～一〇〇二。

①

○空也 九〇三～九七二。六波羅蜜寺の前身である西光寺を創建した。

○聖者 聖人。真理を悟った者。「大宰問於子貢曰、夫子聖者、与何其多能也」(『論語』子罕)。「阿闍梨者義何謂耶。於世間中、得_レ名_二聖者_一。何謂為_レ聖。聖名_二無著_一、少欲知足亦名_二清淨_一。能度_二衆生_一、於_二三有流生死大海_一。是名為_レ聖」(『大般涅槃經』(南本))卷八「大正一二一六五四上」。「度于」の項参照。

○權輿 物事のはじめ。ことの起こり。ここでは寺を創建すること。「於_レ我乎、夏屋渠渠、今也每_レ食無_レ余、于嗟乎、不_レ承_二權輿_一」(『詩經』秦風・權輿)。「夫泰極剖判、造化權輿。体兼_二晝夜_一、理包_二清濁_一」(左思「魏都賦」、『文選』卷六)。「於是玄冬季月、天地隆烈。万物權_二輿於内_一、徂_二落於外_一」(楊雄「羽獵賦」、『文

選」卷八)。「權輿、胚渾、玄黃既分、煦嫗嫗、肇生三蒸民」。天命「聖神」、是為「大人」(白居易「中和節頌」、『白氏文集』卷二十九「一四九三」)。

○中信 生没年未詳。空也の弟子。六波羅蜜寺第二世。

○上人 高僧への敬称。「上人、処世界」、清浄何所似」(白居易「贈別宣上人」、『白氏文集』卷十四「〇七五五」)。

○潤色 光彩を加える。ここでは寺を中興すること。「子曰、為

命、卑謹草創之、世叔討論之、行人子羽修飾之、東里子產潤色之」(『論語』憲問)。「内設金馬石渠之署、外興樂府協律之事、以興廢繼絶、潤色鴻業」。是以衆庶說豫、福応尤盛」(班固「兩都賦序」、『文選』卷一)。「況賦者、雅之列、頌之儔、可以潤色鴻業、可以發揮皇猷」(白居易「賦賦」、『白氏文集』卷二十一「一四二二」)。

○寧非 どうしてでないことがあろうか。「我寧不說法、疾入於涅槃」(『法華經』卷一・方便品「大正九一九下」)。「菩薩境為法界者、底惡生死下劣小乘尚即是法界。況菩薩法寧非仏道」(『摩訶止観』卷五上「大正四六一五〇上」)。

○如来勅 如来の命令。「若言仏法必定無我、是故如来勅諸弟子、修習無我上、名為顛倒」(『大般涅槃經』(南本)』卷七「大正二二一六四八上」)。

○如来使 如来の使者。「若是善男子善女人、我滅度後、能竊為一人説法華經一乃至一句」。当知是人、則如来使、如来所

遣、行如来事」。何況於大衆中「広為人説」(『法華經』卷四・法師品「大正九一三〇下」)。

○娑婆世界 この世。「世尊、若聽我等、於仏滅後、在此娑婆世界、勲加精進、護持誦書、写供養是經典者、当下於此土而広説之」(『法華經』卷五・從地踊出品「大正九一三九下」)。「男女」の項参照。

○度于 を濟度する。「説仏智慧故、諸仏出於世、此一事実、余二則非真。終不下以小乘、濟度於衆生上。仏自住大乘、如其所得法」。定慧力莊嚴、以此度衆生」(『法華經』卷一・方便品「大正九一八上」)。次項参照。

○濁惡衆生 五濁十惡がはびこる末世の衆生。「汝等二人持是妙法、慎莫忘失。為未來世濁惡衆生、滅衆罪障故」(『観仏三昧海經』卷十「大正一五一六九六中」)。

○妙法一乘 『法華經』一乗の教え。「若但以真如、為其妙法一乗之体、蓮華二義出水・開敷喻寛法狭。理必不然」(基「妙法蓮華經玄賛」卷一本「大正三四一六五八下」)。

○念仏三昧 南無阿弥陀仏の名号を専らに称えること。「見此事者、即見十方一切諸仏」。以見諸仏故名念仏三昧」(『観無量寿經』「大正二二一三四三中」)。

○南北二京 南都と平安京。

○名徳 名声と徳行がともに備わる僧侶。「刑部尚書韓臯、名徳之後、鬱然公才」(白居易「除韓臯東都留守制」、『白氏文集』卷

三十八「一七八三」。

○日来 連日やって来る。「就_二花枝_一、移_二酒海_一、今朝不_レ醉明朝悔、且算歡娛逐_レ日来、任他容鬢随_レ年改」(白居易「就_二花枝_一」、『白氏文集』卷五十一「二三三」)。

○通 たがいに。「白髮」の項参照。

○講師 仏典を講説する僧侶。「丙寅、講_二金光明最勝王經_一于太極殿」。朝廷之儀、一同_二元日_一。請_二律師道慈_一為_二講師_一、堅藏為_二読師_一。聴衆一百、沙弥一百」(『統日本紀』卷十二・天平九年十月)。

○聴衆 講会を聴聞する大衆。「我等大衆皆悉往_レ彼、為_二作_二聴衆_一」。是説法師、令_下得_二利益安樂_一、無_レ障身意泰然_上。我等皆當_二尽心供養_一、亦令_下聴衆安隱快樂、所住国土、無_二諸怨賊恐怖厄難飢饉之苦_一、人民熾盛_上」(『金光明最勝王經』卷四「大正一六一四二二中」)。「來意有_レ五。一為_レ證_レ信。標_二聴衆_一者助_二成慶喜_一、聞_レ法可_レ信」(基『妙法蓮華經玄贊』卷一末「大正三四一六六六上」)。

○東西兩都 東の京と西の京。

○男女 男と女。「故娑婆男女由_レ我得度者、万五千五百七十二人。示_二生無常_一」(白居易「唐撫州景雲寺故律大德上弘和尚石塔碑銘并序」、『白氏文集』卷二十四「一四六二」)。

○雲集 雲のように人々が多くあつまること。「所散諸物、從_二十方_一來、譬如_二雲集_一、變成_二宝帳_一、遍_二覆此間諸仏之上_一」(『法

華經』卷六・如來神力品「大正九一五二上」)。「朝發_二河海_一、夕宿_二江漢_一、沈浮往來、雲集霧散」(班固「西都賦」、『文選』卷一)。

○即 すなわち。とりもなおさず。「諸善男子、我於_二過去諸仏_一、曾見_二此瑞_一、放_二斯光_一已、即_レ説_二大法_一」(『法華經』卷一・序品「大正九一三下」)。

○合十指 十本の手指を合わせて合掌する。「大王、我今當_二還供_二養此仏_一。白已、即坐_二七宝之台_一、上_二昇虛空_一、高七多羅樹、往_二到仏所_一、頭面礼_レ足、合_二十指爪_一、以_レ偈讚_レ仏」(『法華經』卷六・藥王菩薩本事品「大正九一五三中」)。「時淨藏・淨眼二子、到_二其母所_一、合_二十指爪掌_一白言」(『法華經』卷七・妙莊嚴王本事品「大正九一五九下」)。

○寸心 心。方寸。「函_二縣邈於尺素_一、吐_二滂沛乎寸心_一」(陸機「文賦」、『文選』卷十七)。「右甚雖_二輕微_一、當_二土所_一出、聊表_二寸心_一。謹狀」(大江朝綱「為_二清愼公_一報_二吳越王_一書」、『本朝文粹』卷七「一八三」)。

○開講 講会を開く。「如_二僧伝中_一、有_二乘法師_一。先与_二一法師_一住_二開泰寺_一。此師中途離_二開泰寺_一。後時乗於_二本寺_一開_レ講、序_下此仏果出_二二諦_一義_上」(湛然『止観輔行伝弘決』卷第三之三「大正四六一二三五上」)。

○已垂 すでにならうとする。「我年過_二半百_一、氣耗神不_レ全、已垂_二両白鬢_一、難_レ補_二三丹田_一」(白居易「仲夏肅戒月」、『白氏

文集』卷八〔〇三七一〕。

○八九載 八九年。

○結縁 仏縁を結ぶ。「是国王等或自營弁或勸他人」、乃至百千人等布施結縁」（『地藏菩薩本願經』卷下「大正一三・七八六下」）。「化城喻品説下十六王子所教化衆、生過去結縁之始上」（基「妙法蓮華經玄贊」卷一本「大正三四・一六五二下」）。「且共雲泉結縁境、他生当作此山僧」（白居易「香山寺二絶、其二」、『白氏文集』卷六十四〔三一〇三〕）。

○不知幾万人 幾万人いるのかわからない。「又南抵石澗、夾澗有古松・老杉、大僅十人围、高不知幾百尺」（白居易「草堂記」、『白氏文集』卷二十六〔一四七二〕）。「前不知幾千年、後又數百載、有名無亭、鞠為荒沢」（白居易「白蘋洲五亭記」、『白氏文集』卷七十〔三六〇四〕）。

○何況 ましていうまでもなく。「豈独花堪惜、方知老暗催、何況尋花伴、東都去未廻」（白居易「西明寺牡丹花時、憶元九」、『白氏文集』卷九〔〇三九二〕）。

○転展 次々と。「阿逸多、如是第五十人展、転聞法華經、随喜功德、尚無量無辺阿僧祇」（『法華經』卷六・随喜功德品「大正九・四六下」）。「夢郷遷客展、転臥、抱兒寡婦彷徨立」（白居易「山鷓鴣」、『白氏文集』卷十二〔〇五九〇〕）。次項・次々項、「講經」の項参照。

○随喜 他人の善い行いを見て喜び随う。「如是等類咸於仏前、

聞妙法蓮華經一偈一句、及至一念随喜者、我皆与授記」（『法華經』卷四・法師品「大正九・三〇下」）。「午齋何俟潔、餅与蔬而已、西寺講楞伽、閑行一随喜」（白居易「晚起閑行」、『白氏文集』卷六十九〔三五四一〕）。

○功德 現在あるいは将来に福德をもたらし善い行い。「乃至童子戲、若草木及筆、或以指爪甲、而画作仏像、如是諸人等、漸漸積功德、具足大悲心、皆已成仏道」（『法華經』卷一・方便品「大正九・九上」）。「百千万劫菩提種、八十三年功德林」（白居易「贈僧五首、鉢塔院如大師」、『白氏文集』卷五十七〔二八〇四〕）。前項参照。

○漸々 次第に。前項参照。

○廻向 善根の功德を他の者にふり向ける。廻向。「我所有福業、今世若過世、及見仏功德、尽廻向仏道」（『法華經』卷二・譬喻品「大正九・一二上」）。「過見当来、千万億仏、皆因法成、法從経出、是大法輪、是大宝蔵、故我合掌、至心廻向」（白居易「六讚偈、讚法偈」、『白氏文集』卷七十〔三六一三〕）。

○薰修 香りが衣服に薫じつけられるように、人の身体・精神・言葉などの行為が、心の最奥部に残ったり、習慣となること。「願諸衆生、悉為布施・持戒・忍辱・精進・禅智之所薰修」（『大般涅槃經（南本）』卷十四「大正二・六九七下」）。

○暮春三月 陰曆三月。「暮春三月、江南草長、雜花生樹、群鷺乱飛」（丘遲「与陳伯之書」、『文選』卷四十三）。

○百花 たくさんの花。「百花落如雪、両鬢垂作糸」（白居易

「晚春沽酒」、「白氏文集」巻六「〇二三九」。「万象暎婦仁寿鏡、百花春隔景陽鐘」（温庭筠「上翰林蕭舍人」、「温庭筠詩集」巻四、「千載佳句」巻下「五五九」）。

○争開 きそつて開く。「波瀾晴泛三春色、桃李争開兩岸芳」（陳上

卿「和寧国呂護少府」新開「石渠」、「千載佳句」巻下「五九三」）。

○別修 特別に講会などを修す。「常於寺内別修齋懺、恒専禪礼」。庶藉薰修、奉酬聖沢」（『国清百録』巻三「大正四六一八一二下」）。「無勞別修道、即此是玄関」（白居易「宿竹閣」、「白氏文集」巻二十「一二三四」）。

○四日八講 四日間で八座の『法華經』の講筵。

○号 よぶ。名をつける。「我念過去世、無量無數劫、有仏人中尊、号日月燈明」（『法華經』巻一・序品「大正九一四中」）。

○一日 一日目。

○為導 化導するために。「如是學者、為導御衆生。如是學者、為淨仏土、為學大慈大悲、為學教化衆生」（『放光般若經』巻十四「大正八一〇〇下」）。

○一切男子 すべての男性。「而作是言、一切女人勢不自由、一切男子自在無礙」（『大般涅槃經（南本）』巻十「大正一二一六六八下」）。

○為度 済度するために。「爾來無量劫、為衆生故、方便現涅槃、而実不減度、常住此説法」（『法華經』巻五・如來

寿量品「大正九一四三中」）。

○一切女身 すべての女性。「一切男子」の項参照。

○為済 済度するために。「夫仏説法必為済生。生發希渴之心、名為説因」（基『妙法蓮華經玄贊』巻二本「大正三四一六八〇中」）。

○一切童子 すべての子供。「若於曠野中、積土成仏廟、乃至童子戲、聚沙為仏塔。如是諸人等、皆已成仏道」（『法華經』巻一・方便品、「大正九一八下」）。

○為化 化導するために。「是諸所説、皆為化菩薩故」（『法華經』巻二・譬喻品「大正九一二二中」）。

○一切僧侶 すべての出家者。

○大哉 なんと偉大なことであるか。「大哉大悟大聖主、無垢無染無所著」（『無量義經』「大正九一三八四下」）。

○誓願 仏菩薩の誓い。「世尊、是諸菩薩、甚為難有。敬順仏故、發大誓願」（『法華經』巻五・安樂行品「大正九一三七上」）。

○無得而称之 これを褒めたたえる者がいない。「子曰、泰伯其可謂至德也已矣。三以天下讓、民無得而称焉」（『論語』泰伯）。「齊景公有馬千駟。死之日、民無德而称焉」（『論語』季氏）。「若夫一言一行、盛德之風、琴書芸業、述作之茂、道非兼済、事止樂善、亦無得而称焉」（任昉「為范始興作、求立太宰碑表」、「文選」巻三十八）。「白蓮之種貫花、

無去無來、紺頂之影澄_レ月。無_二得_一而稱_一、其唯妙覺歟」(大江朝綱「朱雀院平_レ賊後被_レ修_二法会_一」願文、『本朝文粹』卷十三[四〇七])。

○**当此時也** この時にあたり。「当_二此時_一也、天地為_レ陵震怒、戰士為_レ陵飲_レ血」(李陵「答_二蘇武_一書」、『文選』卷四十一)。

○**緇素** 緇衣すなわち黒衣と、素衣すなわち白衣。僧侶と俗人。「王都既在_二王舍_一。仏住_二鷲峰_一。城山兩処双彰_二自他_一二化俱説_一。利_二緇_一素_一故」(基『妙法蓮華經玄賛』卷一末「大正三四一六六五下」)。「三台九棘、百辟千僚、華夏遠近、緇素尊卑、同浴_二仏海_一之無辺、須_レ保_二寿木_一之不老」(三善道統「為_二空也上人_一供_二養金字大般若經_一願文」、『本朝文粹』卷十三[四〇九])。

○**勸学会** 現当二世の友として、仏法と文道を互いに相勧め合う意図をもって創始された法会。康保元年(九六四)九月に初めて行われ、断続的に院政期まで続いた。毎年三月・九月の各十五日に行われた。朝には僧侶が『法華經』を講義し、夕には南無阿弥陀仏の念仏を称え、曉に至るまで讃仏の詩を詠じ、その詩は寺に納めた。

○**極楽会** 極楽浄土に往生することを祈願する法会。

○**講經** 經典を講義する。「梁有_二満法師_一、講_レ經一百遍、於_二長沙郡_一焼_レ身」(『法華文句』卷八下「大正三四一一四下」)。「故身自精勤、講_レ經、図_レ像、十之三四、聞_レ説見_レ形展_レ転随_レ喜、十之八九」(具平親王「普賢菩薩讚」、『本朝文粹』卷十二[三五七])。

○**之後** 後ののち。「且欲_レ使_四後代知_三陛下踐祚_一之後、有_二朴直敢言之臣出_一焉」(白居易「才識兼茂明於体用科策一道」、『白氏文集』卷三十[一四九八])。

○**以詩** 詩をもつてする。「東南一尉、西北一侯、微以_二糾墨_一、制以_二鎖鈇_一、散以_二礼楽_一、風以_二詩書_一、曠以_二歲月_一、結以_二倚廬_一」(楊雄「解嘲」、『文選』卷四十五)。「然千百年後、安知復無_下如_三足下_一者出而知_中愛我詩_上哉。故自八九年來、与_二足下_一小通則以_レ詩相戒、小窮則以_レ詩相勉、索居則以_レ詩相慰、同处則以_レ詩相娛。知_レ吾罪_レ我、率以_レ詩也」(白居易「与_二元九_一書」、『白氏文集』卷二十八[二四八六])。

○**讚仏** 仏を讃える。「若但讚_二仏乘_一、衆生没_二在苦_一、不_レ能_レ信_二是法_一、破_レ法不_レ信故、墜_二於三惡道_一」(『法華經』卷一・方便品「大正九一九下」)。「由_二是讚_一仏故、得_二無量功德_一、歎_二美持經者_一、其福復過_レ彼」(『法華經』卷四・法師品「大正九一三〇中」)。「我有_二本願_一、願以_二今生世俗文字之業、狂言綺語之過_一、転為_二将来世世讚_一仏乘之因、転法輪之縁_一也」(白居易「香山寺白氏洛中集記」、『白氏文集』卷七十[三六〇八])。

○**今此** いまこの。「今_レ此下民、亦孔之哀」(『詩經』小雅節南山・十月之交)。「若非_二甚不可者_一、亦不_二敢切論_一。今_レ此除授実甚不可」(白居易「論_二嚴綬_一狀」、『白氏文集』卷四十二[一九六八])。

○**何無** どうしてゝがないことがあるうか。「曾子怒曰、商女何_レ無_レ罪也」(『礼記』檀弓上)。

○歎仏 仏徳を讃歎する。「爾時妙莊嚴王、讚歎、歎、如、如、是等無量百千万億功德」已、於「如來前」、一心合掌」（『法華經』卷七・妙莊嚴王本事品「大正九一六〇下」）。「其諸菩薩僉然欣悅、於「虛空中」共奏「天樂」、以「微妙音」歌「歎、歎、如、如、德」、聽「受經法」歡喜無量」（『無量壽經』卷下「大正二二二七三下」）。

○滿座 その座にいる者すべて。「淒淒不似向前声」、滿座、重聞皆掩泣」（白居易「琵琶引」、『白氏文集』卷十二「〇六〇二」）。「武衛尚書河源相公、然諾其言」、吟詠其意。即命「滿座」、獻「惜秋詞」（源順「九月尽日於「仏性院」惜秋」、『本朝文粹』卷八「二二六」）。

○許諾 承知する。「巫曰、今茲主必死。若有事於東方」、則可以逞。獻子許諾」（『春秋左氏伝』襄公十八年）。

○誰人 どの人。だれ。「誰人隴外久征戍、何処庭前新別離」（白居易「中秋月」、『白氏文集』卷十六「〇九九三」）。

○間然 非難する。欠点をあげつらう。「子曰、禹吾無間然矣。非「飲食」、而致「孝乎鬼神」、惡「衣服」、而致「美乎黻冕」、卑「宮室」、而尽「力乎溝洫」。禹吾無間然矣」（『論語』泰伯）。「皋夔益稷禹、粗得無間然」（元稹「和「樂天」贈「樊著作」」、『元氏長慶集』卷二）。

②
○經 『妙法蓮華經』。

○題目 經典の首題。ここでは詩会の句題。「第三解」經品得名者、

且經題目、妙法蓮華經名者、梵云「薩達摩・奔荼利迦・素咀攬」。薩者正妙之義。故法護云「正法華」、羅什云「妙法蓮華」（基『妙法蓮華經玄贊』卷一本「大正三四一六五七下」）。「於是或信馬以閑行、或下車以眺望。居無常座、掃苔而暫代筵、至無定家」、尋花而不問主。便示題目、曰、逐処花皆好」（紀齊名「暮春遊覽同賦「逐処花皆好」、『本朝文粹』卷十「三〇三」）。○往昔 遠い過去世。往古。「世尊往昔、說法既久、我時在座、身体疲懈、但念「空無相無作」、於「菩薩法遊戲神通、淨「仏国土」成「就衆生」、心不「喜樂」（『法華經』卷二・信解品「大正九一六中」）。

○信心 信ずるところ。「以「經威力」故、發「其人心」歛然得廻。信心既發、勇猛精進故、能得「是經威德勢力」得道得果」（『無量義經』「大正九一三八八中」）。

○善心 善いところ。「葉王、若有「惡人」以「不善心」。於「一劫中」現「於仏前」。常毀「罵仏」其罪尚輕」（『法華經』卷四・法師品「大正九一三〇下」）。「無「不孝父母」、不「敬沙門」、邪見不善心」、不「撰「五情」不」（『法華經』卷七・妙音菩薩品「大正九一五五下」）。

○其心 そのところ。「爾時四部衆、見「日月燈仏、現「大神通力」、其心皆歡喜、各各自相問」（『法華經』卷一・序品「大正九一四下」）。

○乱心 乱れたところ。「若人散乱心、乃至以「一華」、供「養於画像」、漸見「無數仏」（『法華經』卷一・方便品「大正九一九上」）。

「一称南無仏」の項参照。

○再称 二度仏号を称える。

○三称 三度仏号を称える。

○其称 その称すること。「若三千大千国土、満中夜叉・羅刹、欲来惱人、聞其称観世音菩薩名者、是諸惡鬼、尚不能下以惡眼視之、況復加害」(『法華經』卷七・観世音菩薩普門品「大正九一五六下」)。

○彼人 かの人。「如此愚人臨命終時、遇善知識種種安慰為說妙法教令念仏。彼人苦逼不遑念仏」(『観無量壽經』「大正二一三四六上」)。

○莫不 しないものはない。「無量壽仏威神無極、十方世界無量無辺不可思議諸仏如来、莫不称歎」(『無量壽經』卷下「大正二一二七二下」)。

○成仏 仏となり、悟りを得ること。「一切諸如来、以無量方便、度脱諸衆生、入仏無漏智、若有聞法者、無一不成仏」(『法華經』卷一・方便品「大正九一九中」)。「一称南無仏」の項参照。

○得道 仏道を成じ、悟りを得ること。「如今者世尊、從生及出家、得道、轉法輪、亦以方便説」(『法華經』卷一・譬喻品「大正九一一上」)。

③

○我党 私のなかま。「我党五六人、適遇郎中之暇景、聊叙詩

酒之飲娛」(菅原道真「晩冬過文郎中「翫庭前早梅」」、『本朝文粹』卷十「二八八」)。「若有故人党結之外、同心合力之徒、可以随喜、可以頌歎」(慶滋保胤「勸学会所、欲被故人党結同心合力建立堂舎状」、『本朝文粹』卷十三「三九八」)。

○一心 心を一つにすること。専心。「又見菩薩、離諸戲笑、及癡眷属、親近智者、一心除乱、撰念山林、億千万歳、以求中仏道上」(『法華經』卷一・序品「大正九一三中」)。「五綵莊嚴、一心恭敬、願追冥福、誓報慈恩」(白居易「繡阿弥陀仏贊并序」、『白氏文集』卷二十二「一四四一」)。次項参照。

○余心 他の心。「歴余一心三觀者、若総無明心未必是宜、更歴余心」(『摩訶止観』卷六下「大正四六一八五中」)。

○千唱又万唱 千回仏号を称え、また一万回仏号を称える。「千弾万唱皆咽咽、左旋右転空傥傥」(元稹「驪国楽」、『元氏長慶集』卷二十四)。

○凡身 凡夫の身体。「此前三人凡身得果聖身涅槃、後之二人凡身得果凡身涅槃」(基『妙法蓮華經玄贊』卷七末「大正三四一七九八中」)。

○登于 ある位にのぼる。「上六、不レ明晦。初登于天、後入于地」(『易經』明夷)。

○覺位 さとりの位。覺者すなわち仏となること。「如夢所見謂有『多生』、覺位唯心都無中実境上」(基『妙法蓮華經玄贊』卷一末「大正三四一六六四上」)。

○且 また。そのうえ。「魚麗」于留「魴鱧、君子有酒多且旨」
〔『詩経』小雅・鹿鳴・魚麗〕。

○何疑哉何疑哉 どうして疑うことがあろうか、どうして疑うことがあろうか。「勅曰、吾所不_レ了、右侯已了、復何疑哉」〔『晋書』卷百四・石勒上〕。「由_レ此而言、則敬不敬之義、悦不悦之理、了然可_レ見、復何疑哉」(白居易「三教論衡、道士問、对」、『白氏文集』卷五十九「二九二〇」)。「法華經之説_二仏果_一、令_二我女不_レ異_二龍女_一焉。彼即身也、是後身也。何疑哉、何疑哉」(慶滋保胤「為_二大納言藤原卿息女女御_一四十九日願文」、『本朝文粹』卷十四「四二二」)。

○中有垂 中に_レが垂れているものがある。「永豊坊西南角園中、有_二垂柳一株_一、柔條極茂」(白居易「楊柳枝詞、序」、『白氏文集』卷七十一「三六三六」)。

○白髮 しらが。「浮生同_二過客_一、前後遞_レ来去、白日如_レ弄珠、出沒光不_レ住、人物日改変、拳_レ目悲_レ所_レ遇、廻念_二念我身_一、安得_レ不_二衰暮_一、朱顏銷不_レ歇、白髮生無數、唯有山門外、三峰色如_レ故」(白居易「重到_二渭上旧居_一」、『白氏文集』卷九「〇四三三」)。

○紵朱衫 朱衣をまとう。「養老令」衣服令によれば、位階相当の上衣は、礼服・朝服とも、五位は「淺緋色」と規定されている。この時大内記であった保胤の官位は従五位下なので、朱の衣を着用していた。「白頭歲暮苦相思、除_二却悲吟_一無_レ可_レ為_二(中略)_一若並如今是全活、紵_レ朱拖_レ紫且開眉」(白居易「歲暮寄_二微之_一三首、

其二、『白氏文集』卷五十四「二四五」)。

○身暫 身はしばらく。「敢嗟身_レ暫黜、所恨政無毗」(元稹「酬_二翰林白学士_一代_レ書一百韻」、『元氏長慶集』卷十)。

○雖在 あるといつても。「子謂_二公治長_一、可_レ妻也。雖_レ在_二縲紲之中_一、非_二其罪_一也。以_二其子_一妻_レ之」(『論語』公治長)。「何年植_二向仙壇上_一、早晚移栽到_二梵家_一、雖_レ在_二人間_一人不_レ識、与_レ君名作_二紫陽花_一」(白居易「紫陽花」、『白氏文集』卷二十四「二四〇四」)。

○柱下 内記の唐名。「張丞相蒼者、陽武人也。好_二書律歷_一。秦時為_二御史_一、主_二柱下方書_一、有_レ罪亡婦。(中略)是時蕭何為_二相國_一、而張蒼乃自_二秦時_一為_二柱下史_一、明_二習天下圖書計籍_一」(『史記』卷九十六・張丞相列傳)。「唱首」の項参照。

○心尚 心はなお。「相去万余里、故人心_レ尚_レ爾」(古詩十九首、第十八首)、『文選』卷二十九。「故人心_レ尚_レ爾、故心人不_レ見」(謝玄暉「和_二王主簿怨情_一」、『文選』卷三十)。

○住山中 山中に住む。「自_レ為_二江上客_一、半在_二山中_一住」(白居易「山中独吟」、『白氏文集』卷七「〇三三〇七」)。

○少壯 年若くさかなこと。「運偶_二三千年聖_一、天成_二万物宜_一、皆當_二少壯日_一、同惜_二盛明時_一」(白居易「代_レ書詩一百韻、寄_二微之_一」、『白氏文集』卷十三「〇六〇八」)。

○愁 なまじいに。うかつにも。十分にものごとを考えずにするさま。「不_下愁遺_二一老_一、俾_レ守_二我王_一」(『詩経』小雅・十月之

交)。「期_レ奮_二乃志_一、將_レ沃_二朕心_一。而天不_二懋遺_一、邦失_二柱石_一」(白居易「贈_二劉綽太尉_一 冊文」、『白氏文集』卷三十四「二五九九」)。「蕪詞」の項参照。

○一事一物 ある事ある物。「其余雜律詩、或誘_二於一時一物_一、發_二於一笑一吟_一、率然成章、非_二平生所尚者_一」(白居易「与_二元九書_一」、『白氏文集』卷二十八「一四八六」)。「備_二一官而無_二一事_一、又不_レ維而不_レ繫」(白居易「汎_レ渭賦」、『白氏文集』卷二十一「一四〇九」)。

○求名聞 世間の評価を求める。「自作_二此經典_一、誑_二惑世間人_一、為_レ求_二名聞_一、故、分別於_二是經_一」(『法華經』卷四・勸持品「大正九一三六下」)。「人多以_二曲名一名_一之、由_レ是名聞_一、洛下」(白居易「不_レ能忘_レ情吟、并序」、『白氏文集』卷七十「三六一〇」)。

○衰暮 年老いる。「唐中大夫、太子少傅、上柱国、馮翊県開国侯、賜紫金魚袋白居易、当_二衰暮之歳_一、中風痺之疾、乃捨_二俸錢三万_一、命_二工人杜宗敬_一按_二阿弥陀・無量寿二經_一、画_二西方世界一部_一」(白居易「画_二西方・幀記_一」、『白氏文集』卷七十「三六〇五」)。

「誠宜_下競_二余日_一而尽_上精、何更矯_二衰暮_一而曠_レ職」(三善清行「詰_レ眼文」、『本朝文粹』卷十二「三五五」)。「白髮」の項参照。

○或記 あるいは記す。「我觀_二聖人意_一、魯史有_二說_一、或記_二水不_レ冰、或書_二霜不_レ殺_一」(白居易「春雪」、『白氏文集』卷一「〇〇二九」)。

○蕪詞 蕪雜なことば。蕪辭。自己の詩文をへりくだつていう。

「昔是南曹聚_レ雪之生、今則東海指_レ雲之吏。学拙官冷、慙_二猷_一、蕪詞、云_レ爾」(源順「夏日陪_二右親衛源將軍初読_二論語_一 各分_二一字_一」、『本朝文粹』卷九「二五九」)。

○狂句 狂った表現の句。「是時大和二年秋、予春秋五十有七、目昏頭白、衰也久矣。拙音狂句、亦已多矣」(白居易「後序」、『白氏文集』卷五十一「二一九三」)。

○摂菩提 悟りへの道を摂りおさめる。「若菩薩成_二就四法_一、能摂_二菩提_一、亦令_二增長_一」(『転女身経』「大正一四一九一六下」)。「功德」の項参照。

○今日 きょう。「得_二宿命通_一、省_二今日事_一、如_下智大師記_二靈山於前会_一、羊叔子識_二金鑲於後身_一者_一歟」(白居易「香山寺白氏洛中集記」、『白氏文集』卷七十「三六〇八」)。

○推為 推薦されてゝになる。「齊名謬非_二客右之才_一、猥載_二柱下之筆_一。推為_二唱首_一、不_レ知_レ所_レ裁、云_レ爾」(紀齊名「暮秋陪_二左相府書閣・同賦_二菊花未_レ遍各分一字_一・応_レ教」、『本朝文粹』卷十一「三二五」)。

○唱首 序者。詩会の披露において、はじめに序者による詩序と詩が読み上げられるからいう。前項参照。

○不敢 あえてゝしない。「至_下於竭_二府庫_一以富_二河北諸將_一、虚_二中国_一以使_二戎狄生_レ心_一、可_二為深憂_一、可_二為痛惜_一、已具_二前奏_一、不_レ敢再陳」(白居易「請_レ罷_レ兵第三狀」、『白氏文集』卷四十二「二九六七」)。

○再辞 再びことわる。「所^レ進官告、今却賜^レ卿。無^レ或^二再^一辞^一。即断^二来表^一」(白居易「答^下韓弘讓^二同平章事^一表^上」)、『白氏文集』卷四十「一九二四」。

○聊述 いささか述べる。「忝侍^二南氏之席^一、慙動^二北山之移^一。聊述^二六韻^一、貽^二之千載^一、云^レ爾」(菅原道真「暮春南亜相山庄尚齒会詩」)、『本朝文粹』卷九「二四五」。

○大綱 おおよその内容。大要。「自^二丞相播兼領^一以来、而撮^二大綱^一、覆^二群吏^一、職以^レ能進、秩由^レ課遷」(白居易「知汴州院官・侍御史盧濛可^二檢校倉部員外郎^一。陝府院官盧台可^二兼侍御史^一。鄭滑院官李克恭可^二試大理評事^一。独孤操可^二衛佐^一。並依^二前知院事^一。同制」)、『白氏文集』卷三十五「二六六四」。

○備於 〴〵に備える。「孟子曰、万物皆備^二於我^一矣」(『孟子』尽心章句上)。「且夫鼓之為^レ用也、或備^二於樂懸^一、或施^二於戎政^一、以諧^二八音節奏^一、以明^二三軍号令^一」(白居易「敢諫鼓賦」)、『白氏文集』卷二十一「一四二〇」。

○後事 将来のこと。「身病向^二鄱陽^一、家貧寄^二徐州^一、前事与^二後事^一、豈堪^二心併憂^一」(白居易「將^レ之饒州、江浦夜泊」)、『白氏文集』卷九「〇四二六」。「草草辞^レ家憂^二後事^一、遲遲去^レ国問^二前途^一」(白居易「初貶^レ官、過^二望泰嶺^一」)、『白氏文集』卷十五「〇八六三」。

○云爾 このように申します。文章の結びのことば。「因附^二前集^一、報^二微之^一、故復序^二于卷首^一、云^レ爾」(白居易「後序」)、『白氏文

集』卷五十一「二一九三」。

「使用テキスト」主に以下に依拠しつつ、適宜、句読点・読み等を私に改めた。

『法華經』『無量義經』『放光般若經』『金光明最勝王經』『無量寿經』『觀無量寿經』『大般涅槃經(南本)』『觀無量寿經』『觀仏三昧海經』『転女身經』『地藏菩薩本願經』『法華文句』『止観輔行伝弘決』『大正新修大藏經』『史記』『晋書』『中華書局版』『論語』『文選』『新釈漢文大系』『白氏文集』『新釈漢文大系・白氏文集歌詩索引・白居易文集校注』『溫庭筠詩集』『元氏長慶集』『四部叢刊』『本朝文粹』『新日本古典文学大系』『続日本紀』『新日本古典文学大系』。

〔附記〕小稿は、二〇一一年九月三日、中国西安市西北大学萃園賓館において開催された、和漢比較文学会第四回特別例会(特別研究発表会)において、「慶滋保胤六波羅蜜寺供花会詩序考」と題して発表したものの一部を、訳註として成稿したものである。また小稿は、平成十八〜二十一年度日本学術振興会科学研究費補助金基礎研究(C)「大江匡房の思想研究」、同平成二十三〜二十六年「聖廟文学」の思想―平安朝文人貴族の天神信仰―における研究成果の一部である。